

# 学生相談における親支援

藤尾未由希<sup>※</sup>

## 1. はじめに

小中学校のスクールカウンセリング活動においては、親支援が重要な位置づけを占めており、多くの支援活動が報告されている(吉川, 2013; 小泉, 2005)。中学校および高校の特別支援教育におけるスクールカウンセラーの活動内容や役割を調査した渡邊(2017)によると、保護者面接は、本人面接と並び、最も多く行われている活動のひとつであった。このように、親支援は小中学校のスクールカウンセリング活動の中でも、中心的な活動と考えられる。

では、学生相談における親支援は、現在どのような位置づけにあるだろうか。青年期後期に分類される大学生は、かつては、大人として考えられることが現在に比べて多かった。そのため、親の側も来談しづらい、学生相談側も親に積極的にアプローチしづらい側面があったのではないかと考えられる。しかしながら、10年ほど前から、学生相談に親や家族が関与することが多くなっていることが多くの文献で指摘されている。例えば、高石(2010)は、「今日の大学においては保護者への関与が学生支援の一環として積極的な意義をもち、また実際にもさまざまな支援が行われている」と指摘している。また、ある大学の学生相談の活動報告によると、平成27年度から平成28年度にかけて、全体の相談回数は大きく変わらないものの、親の相談回数が90回から202回と、2倍以上に増えたという(李, 2017)。大学ごとに多少の差はあると思われるが、学生支援において、総じて、親を支援対象とする機会が増加していることが見て取れる。

そこで、本稿では、①学生相談において親支援が

重要とされるようになった背景について、親子関係理論の変容と発達障害支援の拡がりの2点を取り上げた上で、②親支援の内容と今後の課題について論じていきたい。

## 2. 学生相談における親支援はなぜ広まってきたのか

### 親子関係の変化

学生相談において、親支援が積極的に行われるようになった背景の1つとしてしばしば論じられることに、親子をめぐる社会的状況の変化がある。少子化や、高等教育への進学率の向上、親世代の現役期間の延長などの影響で、青年と親が密着した関係を維持するようになったという指摘は数多くある。高石(2010)は、自身の学生相談経験をもとに、大学生活の中で困難があった際に、「学生が親に言う、それを親が大学に持ち込み、一緒に解決を図る」という構造が増えてきたと述べている。

以上のような状況もあってか、青年期の親子関係に関する理論も同時期に変化が見られる。Hollingworth(1928)が「心理的離乳」という概念を提唱したことにはじまり、これまで、青年期の親子関係に関する理論は様々な提唱されてきた。当初は親からの「自立」、「自律」に焦点が当たっていたが、2000年代前後の傾向として、青年期以降も、子どもにとって親が重要なサポート源であることを示す研究が増えている。例えば、大学生を対象とした研究によって、家族からのソーシャルサポートが、大学生のストレス軽減に影響を与えることが示唆されている(嶋, 1992)。また、Cummings, Davies, &

※ 帝京大学文学部心理学科

Campbell (2012) は、親の受容や応答性など、情緒的な関わりが、青年期以降の子どもの社会性の発達や、自尊心の形成に影響を与えることを示している。こうした研究の蓄積により、「親との間に継続的な愛着関係を結び、情緒的なつながりを持ちながら、自律の課題に取り組む」という青年期の新しい親子関係モデルが提唱された (Santrock, 2012)。大学生であっても、親を支援対象とすることの意義が示されたと考えられる。

### 発達障害支援の拡がり与学生相談

学生相談に親が積極的に関与するようになったもうひとつの背景として、発達障害支援の拡がりを指摘する声も多い。2005年に発達障害者支援法が施行されて以降、ペアレントメンターの養成 (原口・小倉・山口・井上, 2020) や、巡回相談事業の整備 (大橋・原口, 2019) など、現在も様々な取り組みが行われている。「特別支援教育」や「インクルーシブ教育」といった言葉も広まり、大学入学よりも前に、専門的な相談機関に通ったり、スクールカウンセラーに相談をした経験がある子供、および親が増えてきているだろう。

未成年者、特に高校生以下の子どもが精神科や児童精神科を受診したり、心理相談機関に来談したりする際、その多くは、親が様々な機関を調べ、予約を取り、少なくとも初回は、親と子どもが一緒に来院、来談するというのが一般的であろう。また、はじめに述べた通り、学校における親支援は、本人への直接支援と並び、スクールカウンセラーの中心的な業務のひとつである。つまり、乳幼児期から高校までの支援においては、一般的に、「親が子どもの抱える問題の解決に共に取り組むこと」が前提とされているのである。こうした前提は、発達障害であるかどうかに関わらないが、発達障害の場合、発達の早期から学童期、思春期に至るまで継続的に支援を受けていることが多く、親子で共に支援を受ける期間も長期にわたるといった特徴がある。その結果、幼稚園や小、中学校で発達障害の診断を受けた学生は、本人のみならず、親もともに闘ってきたという自負を持つ (高石, 2009)。吉村 (2017) は、自身

の臨床経験から、「高校以前に特別支援を受けてきた学生の家族などは、すでに本人とともに支援の場にいることに慣れており、支援者が教えられることも少なくない」と述べ、親を学生相談の対象とすることの意義を考察している。また、大学生を対象とした調査から、自閉症スペクトラム障害 (ASD) 傾向を有する学生の方が、親への相談をより多く行っていることが示唆されている (吉村・岡・山岸, 2014)。本人だけでなく、親から情報を得ること、親に直接働きかけを行うことの重要性を示唆する知見であろう。その一方で、親子の密着が極端になった場合、家族システムが分裂することになりかねないという、亀口 (2010) の指摘も忘れてはならない。支援者には、状況に応じて、親に支援に入ってもらう時期であるのか、一歩引いて見守ってもらう時期であるのか、柔軟に判断し対応する力が求められるのであろう。

また、発達障害支援においては、ライフステージに沿った生涯支援が重要と考えられている。2016年の発達障害者支援法の改正で、「切れ目のない支援」という言葉が追加されたことから、生涯支援を重要と考えていることが分かる。そして、この生涯支援のひとつとして学生相談を利用する学生が今後増えることが予想される。「大学生になる」ということは、ライフステージ上の重要なターニングポイントのひとつである。4年間の長期的な展望の中で学習のスケジュールを立てる必要があること、クラス的なつながりが薄い中で対人関係を形成する必要があることなど、それまでの学校生活から様々な変化が生じ、これらは、時として発達障害を有する学生にとって大きな障壁になる。それに備えて、必要な支援に関する情報収集をする親も少なくない。実際に、筆者が勤務する児童精神科クリニックにおいても、大学進学後に、最も身近に支援を受けられる場として、学生相談を紹介したり、学生相談と連携を行ったりすることがある。このように、発達障害者へのライフステージに沿った本人支援・親支援が、学生相談の場で展開されるようになり、学生相談での親支援の機会が増えたという側面もあるだろう。

### 3. 学生相談における親支援の実際と課題

学生相談への親のあらわれ方、関わり方は多様で、吉村 (2016) はそのあらわれ方を5つのタイプに分類している。すなわち、タイプ1: 登場しない (語りにも登場しない)、タイプ2: 登場しない (語りには登場する)、タイプ3: 先に登場する (本人は登場しないこともある)、タイプ4: ともに登場する、タイプ5: 本人の支援のために登場してもらう、という5つである。吉村 (2016) は、自身が所属する大学の学生相談をレビューし、その内訳についても報告している。それによると、タイプ3の「親が先に登場するケース」が60%、タイプ5の「本人の支援のために親に登場してもらう」ケースが20%と、親が先行して学生相談につながる事例が多いことがわかる。

相談にあたって、親が先行するケースの特徴について、佐藤ら (2018) が調査を行っている。この調査では、平成26年度から平成28年度までの3年間に、親・家族のみで自発来談した98事例を分析している。相談回数は1回のみが73%で3分の2以上を占めており、親自从来談したとしても、継続的に学生相談で相談を続けることは稀であるという点だが、一般的なカウンセリングとは異なる特徴と言えるだろう。このことから、1度の相談で学生が置かれた状況や家族関係についてアセスメントを行い、親がとるべき対応や、より適切な相談機関について、情報提供を行う力が必要とされると考える。

また、李 (2017) では、親が先行するか、カウンセラーから働きかけるかによらず、「親との連携が必要なケース」の例を5つ挙げている。1つ目は「配慮願い」で、発達障害や精神症状による合理的配慮に関連するものである。大学入学以前から支援を受けている場合には、その支援をそのまま継続すべきか、大学での目標を今一度見直すべきか検討することが重要であろう。一方、大学入学を期に、発達障害傾向に学生自身が気づいた場合には、親の受け止めに気を配りながら、これまでの学生の状況について、親から情報を得ることが求められる。

そのほか、「親との連携が必要なケース」として、

李 (2017) では、「自殺の危険」がある場合や、「事故・事件の加害者・被害者」となった場合、「精神障害」が疑われる場合、「他害などの問題行動」が見られる場合が挙げられている。いずれも、学生本人およびその周囲の安全や命に関わる問題であり、そのような危機的状況では、親に連絡を取るというのは当然のことであろう。加えて、休学や復学の決定のように、本人の意向だけでは決定できない問題もある。このような危機的状況に陥った学生が親への連絡を拒んだ場合、カウンセラーは苦しい立場に立たされることとなる。斉藤・飯田・川崎 (2013) は、自殺未遂学生が親に連絡しないでほしいというなど、「つながり」を拒むことに苦慮したカウンセラーが多いと報告している。家族支援に必要な資質として、学生相談カウンセラーは、「信頼を得られるような姿勢と人生経験、高い専門性」を挙げている (斉藤・飯田, 2009)。ひとりひとりのカウンセラーが、専門職として、このような資質の向上を目指して研鑽を積むことはもちろんだが、大学全体としての研修の整備が重要であろう。

### 4. おわりに

近年、学生相談において親支援が行われる機会は、以前に比べると多くなっており、その意義は確かだと考えられる。しかしながら、親が先行して来談する場合、親子でともに来談する場合、親が来談したくても困難な場合、親の来談を学生が拒否している場合等、学生一人一人、状況が大きく異なる。また、親との「愛着」を維持しながらも、学生の将来的な「自律」を念頭に置いて支援を行うことが必要とされる。学生にひとりで相談に来てもらうことが大事なタイミングや、親以外のネットワーク、関係性を広げるべきタイミングもあるだろう。学生と親の関係、それぞれが置かれた状況を見極め、時期を逃さずに、柔軟に親子に対応できる体制の整備や、研修の機会が今後ますます求められる。



## 引用文献

- Cummings, E. M., Davies, P. T., & Campbell, S.B. (2006). Developmental psychopathology and family process: Theory, research, and clinical implications. The Guilford Press. 菅原ますみ (監訳). 発達精神病理学—子どもの精神病理の発達と家族関係. ミネルヴァ書房.
- 原口英之・小倉正義・山口穂菜美・井上正彦 (2020). 都道府県・政令指定都市におけるペアレントメンターの養成及び活動に関する実態調査—自閉症スペクトラム研究, 17, 51-58.
- Hollingworth, L. S. (1928). The psychology of the adolescent. Appleton.
- 亀口憲治 (2010). 発達障害の家族支援—子育て支援と心理臨床, 2, 6-12.
- 小泉隆平 (2005). 不登校女子高校生との同一セラピストによる母子並行面接—面接中に秘密を生成させることによって面接の「枠」を守る工夫について—心理臨床学研究, 23, 244-255.
- 李敏子 (2017). 学生相談における親への支援—相山女学園大学学生相談室活動報告, 12, 7-16.
- 大橋智・原口政明 (2019). 地域におけるポジティブな行動支援としての早期発達支援の「実装」のために—切れ目のない行動支援を実現するためのコミュニティ支援モデルの展望—発達障害研究, 41, 196-204.
- 斉藤美香・飯田昭人 (2009). 学生相談における家族支援の動向について—北翔大学北方圏学術情報センター年報, 2, 49-55.
- 斉藤美香・飯田昭人・川崎直樹 (2013). 学生相談における自殺未遂学生への支援—北海道大学学生相談室における動向—北翔大学北方圏学術情報センター年報, 5, 67-72.
- Santrock, J. W. (2012). Adolescence 14th edition. Mcgraw-Hill.
- 佐藤静香・吉武清實・松川春樹・中島正雄・小島奈々恵・中岡千幸…池田忠義 (2018). 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 4, 45-483.
- 嶋信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルポジティブなかかわりの日常ストレスに対する効果—社会心理学研究, 7, 45-53.
- 高石浩一 (2009). 大学生と発達障害—そだちの科学 13—日本評論社.
- 高石恭子 (2010). 学生期の親子関係と大学における親支援のあり方について—甲南大学学生相談室紀要, 18, 49-58.
- 渡邊はるか (2017). 特別支援教育におけるスクールカウンセラーの役割—A県における実態調査から—目白大学総合科学研究, 13, 83-94.
- 吉川麻衣子 (2013). 自閉症を抱える小1児童の校内支援体制づくりの実践—学校と保護者を橋渡しするスクールカウンセラーの立場から—教職実践研究, 3, 25-30.
- 吉村真奈美 (2016). 学生相談における家族支援—陰に陽に—津田塾大学紀要, 48, 73-88.
- 吉村麻奈美・岡伊織・山崖俊子 (2014). 自閉症スペクトラム障害が疑われる女子学生の幼少期からのいじめ体験 (第一報)—その実態に対する回顧的調査—日本学生相談学会第32回大会発表論文集.